

造形制作活動に対する意欲の決定因

赤間 健一*・若山 哲*

The determinant of motivation for Modeling Activity

Kenichi Akama and Tetsu Wakayama

概 要

造形活動における苦手意識の軽減のために授業改善を行う研究が行われているが、苦手意識の軽減の効果については曖昧な部分がある。研究で用いられる課題もさまざまであり、課題によって効果が異なる可能性もある。また授業改善の効果は授業に意欲的に取り組むことがその前提にあると考えられる。そこで本研究では、授業に対する意欲の決定因として、好意度や苦手意識、作品のイメージしやすさや制作しやすさを取り上げ、何が意欲に影響しているかを検討した。さらに課題による違いの有無を検討するために5つの制作課題を対象とした。制作活動を行う授業の受講者を対象に、質問紙調査を行った。その結果、制作活動への好意度、苦手意識は意欲に影響しておらず、イメージしやすさが意欲に影響する課題と制作しやすさが影響する課題があることを示した。この結果に基づき、制作活動への意欲を高める方法やその意義について論じた。

キーワード：制作活動、意欲、イメージしやすさ、制作しやすさ

問題と目的

保育所保育指針（厚生労働省、2018）、幼稚園教育要領（文部科学省、2018）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（総務省、2018）では、「表現」の領域において、その目的を、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と定めている。音楽表現、身体表現、造形表現など様々な表現活動を通してこの目的を達成するよう保育が行われるが、「自分なりに表現すること」を大切にするとき重要なのは子どもが意欲を持つて主体的に取り組むことである。

しかしながら、井ノ口（2019）は、造形表現の現場に、子ども中心ではなく、大人の論理による表現活動、つまり、大人目線での「同じような作品」、「幼児らしい、かわいらしい作品」を作らせているという、本来の「表現」という領域の目的とは異なる現状があることを指摘した。

その原因として、保育者の造形活動に対する認識や知識が関係している可能性がある。中でも苦手意識に焦点を当て、その軽減のための試みに関心が集まっている。例えば、松下（2015）は、幼稚園・小学校の教員の多くが苦手意識を持って造形活動を行っていることを報告した。また横田ら（2020）は、若手保育者が造形活動に関して抱えている課題として、造形制作全般に関する手順・方法についての悩みや不安が最も多く、レポート

リー不足により子どもとの関わりにおいて、興味・関心や発達段階に応じた活動内容を選択することが難しいと感じている可能性を指摘した。

保育者だけではなく、保育者を目指す学生においても、造形活動に対する苦手意識を持っている学生が少なくないことを示した研究もある。例えば、佐善（2009）は、美術に苦手意識を感じる学生が68%、いままでの学校において、創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことが出来なかった学生が52%であったことを、またその翌年には、美術に苦手意識を感じる学生が64.2%、いままでの学校において、創造の喜びや作品制作の充実感を味わうことが出来なかった学生が48.8%いたことを報告した（佐善、2010）。降旗（2016）も大学生の60%が図画工作・美術に苦手意識を持っていることを示した。さらに、大塚・稲田（2021）は、造形に関する授業改善の取り組みを扱った文献のレビューから、造形指導に関する課題には、教員側と学生側のそれぞれに起因する課題があると主張し、学生側に起因する課題の一つに、造形に対する苦手意識があると指摘した。また島田（2015）は、学生自身の造形活動の意識について、好き、やや好き、という学生が80%以上である一方、その中の35.2%は苦手、またはやや苦手であり、好きであっても苦手であるという学生が存在することも示した。以上のように、保育者や保育者を目指す学生の中には、造形表現に対して苦手意識を持つものが少なくないと考えられる。

* 福岡女学院大学

苦手意識の原因に関する研究では、香月（2018）は、幼少期の経験の苦手意識への影響を検討した中で、子ども自身の発想や努力等を認める言葉は言われて嬉しかった言葉であり、大人が作らせたものと比較して発せられた言葉は嫌な言葉、評価であると指摘した。これらの言葉を幼少期にかけられたことが、のちの好き、嫌いに影響すること、さらに、苦手意識を持っている学生は、他者からの評価を気にして、自由に自分の表現ができない傾向があることも指摘した。また、伊東ら（2022）は、造形活動におけるつまずきの要因について検討し、自信のような本人の自己評価（の低さ）と、制作において他者の活動を参照すること（ができないこと）、また手先の不器用さなどの身体性の困難さをその要因としてあげた。これらの要因によるつまずきが苦手意識の元にある可能性も考えられる。

造形表現に対する苦手意識を軽減するための授業改善等に関する研究もある。例えば、前沢（2022）は、制作に対する肯定的意識を持つことができるようにするためには、テーマを自由に決めることができるようにすることで主体的に制作に取り掛かることができ、かつ自分でテーマを選ぶことで興味・関心のあるものを選ぶことができ、それにより制作にイメージを持ちやすくなるようにすること、さらに多面的に褒める機会を設けることが有効であることを指摘した。上田・石垣（2019）は、発想への意欲を高めることで、絵画制作意欲への動機づけを高めることができることを報告した。他にも、辻本（2020）は、描画材理解を目的とした抽象的表現活動が経験不足に起因する苦手意識からの解放に効果があったと報告した。降旗（2016）は、学生の記述から、苦手意識を減少させるための要素として、上手・下手の呪縛から解放させること、うまさより自分らしさの表現を目指すこと、自分らしさの表現を可能にする用具の知識・技能、表現本来の楽しさを味わわせること、自分らしい表現が認められる学習空間の5つを抽出した。

これまでに報告された苦手意識の原因や苦手意識の軽減に効果がある要因からは、制作する対象の決定における主体性、テーマを主体的に選ぶことや、描画材等の表現を可能とする用具の知識やそれを使う技能の理解、それらに基づく制作対象のイメージのしやすさ、表現本来の楽しさを体験すること、上手・下手という基準ではなく、自分らしい表現が認められること、上手・下手以外の多様な視点から褒めることなどが、苦手意識の軽減、もしくは肯定的意識の向上に効果があると考えられる。

しかしながら、これら苦手意識の軽減について報告した研究の多くは、授業の中のある一つの課題の制作を通してその効果を検証しており、造形活動一般について、というよりは、それぞれの課題に限定される効果である可能性もある。また苦手意識の軽減が、保育者や学生にどのような影響を及ぼすかという点についても十分に検討されていない。また、授業改善による効果が得られ

るためには、学生が授業に意欲的に参加することが前提になると考えられる。そこで本研究では、課題による違いの有無を検討するために、異なる5つの課題に対する学生の意識、特に意欲について検証する。

上手・下手という基準ではなく、学生が自分らしく表現することができるように課題に取り組めるよう、作品に対する評価は行わず、課題に取り組む意欲に対する影響について検討する。島田（2015）が示したように、好き、嫌いと苦手意識は必ずしも対応していない可能性があるため、それぞれが意欲に対してどのように影響しているのかを検証する。また上田・石垣（2019）が示したように、発想への意欲が制作意欲への動機づけを高めたということから、作品のイメージのしやすさも意欲を高めると予想される。加えて、伊東ら（2022）が示したように、自信や身体性の困難さがつまずきの要因であったことから、制作に対するポジティブな見通しを反映するものとして制作しやすさの認知も意欲に影響する要因として取り上げる。

以上から、本研究では、制作活動に対する意欲が、制作活動に対する好き・嫌いや、得意・不得意といった意識に影響されているのか、また制作物のイメージのしやすさや、制作のしやすさに影響されているのかについて検討する。また、4つの課題に対する意識を比較し、制作物によってその影響が異なるのかについても検討する。

方法

調査参加者 制作活動を含む授業を受講する女子大学生51名（平均年齢18.8（SD=0.6）歳）が本調査に参加した。

調査内容 年齢、性別に加え、制作活動に対する意識を4件法（好意度：1. 苦手である、2. やや苦手である、3. どちらかといえば好きである、4. 好きである、得意度：1. 得意ではない、2. あまり得意ではない、3. どちらかといえば得意である、4. 得意である）で回答を求めた。また、ペープサート・指人形、壁面構成、身につけるもの、幼児のおもちゃ、クリスマスの制作のそれぞれの課題について、制作活動に対する意欲（1. やる気がでなかった、2. あまりやる気がでなかった、3. やや意欲的に取り組めた、4. 意欲的に取り組めた）、アイデアのイメージしやすさ（1. イメージしにくかった、2. ややイメージしにくかった、3. ある程度イメージしやすかった、4. イメージしやすかった）、制作しやすさ（1. 制作するのが難しかった、2. やや制作するのが難しかった、3. ある程度制作しやすかった、4. 制作しやすかった）を4件法で回答を求めた。

手続き 授業終了後に Google Form を用い、各自のペースで回答を求めた。

倫理的配慮 回答は匿名で処理されること、調査への参加は授業とは無関係であること、回答をしない場合に不利益がないこと、途中で回答をやめたり、撤回したりす

る自由があること、データは研究以外の目的で使用しないこと、質問に回答する準備があることを伝え同意を得た上で調査に協力を求めた。

結果

制作活動に対する意識、課題ごとの意欲、イメージしやすさ、制作しやすさの平均値、標準偏差を表1に示した。

意識間の関係について、相関係数を算出した結果、好意度と得意度には中程度の正の相関が見られた ($r=.44$, $p<.01$)。制作活動が好きであるほど、得意でもあると認識している傾向があった。好意度は、ペープサート・指人形 ($r=.30$, $p<.05$) に対する意欲と、幼児のおもちゃへの意欲 ($r=.32$, $p<.05$)、イメージのしやすさ ($r=.43$, $p<.01$)、制作しやすさ ($r=.50$, $p<.01$) と正の相関が見られた。また、得意度は、ペープサート・指人形 ($r=.30$, $p<.05$)、身につけるもの ($r=.31$, $p<.05$) のイメージしやすさと、幼児のおもちゃのイメージしやすさ ($r=.30$, $p<.05$)、制作しやすさ ($r=.28$, $p<.05$) と正の相関が見られた。各課題に対する意欲、イメージしやすさ、制作しやすさの関連を検討するために相関係数を算出し表2から表6に示した。その結果、ペープサート・指人形 (表2)、壁面構成 (表3)、身につけるもの (表4)、幼児のおもちゃ (表5) においては、意欲、イメージしやすさ、制作しやすさは互いに、正の相関関係にあった ($.32<r<.68$, $ps<.05$)。クリスマスの制作 (表6) のみ、

表1 基礎統計量

	平均値	標準偏差
意識		
好意度	3.26	0.85
得意度	2.29	0.76
意欲		
ペープサート・指人形	3.59	0.57
壁面構成	3.80	0.45
身につけるもの	3.45	0.73
幼児のおもちゃ	3.47	0.73
クリスマスの制作	3.78	0.50
イメージしやすさ		
ペープサート・指人形	3.25	0.82
壁面構成	3.75	0.52
身につけるもの	3.08	0.84
幼児のおもちゃ	3.10	0.92
クリスマスの制作	3.78	0.46
制作しやすさ		
ペープサート・指人形	3.29	0.78
壁面構成	3.49	0.78
身につけるもの	2.88	0.91
幼児のおもちゃ	3.16	0.90
クリスマスの制作	3.41	0.80

意欲とイメージのしやすさに中程度の正の相関 ($r=.66$, $p<.001$) が見られたが、制作しやすさはどちらも有意な相関関係にはなかった。

各課題において制作意欲に対して、イメージしやすさと制作しやすさが影響しているかどうかを検討するために、階層的重回帰分析を行った。好意度や得意度が意欲に影響している可能性も考慮し、Step1で好意度と得意度を説明変数として、Step2で、イメージしやすさと制作しやすさを説明変数として回帰モデルに投入した。いずれの課題においても VIF は 2 未満であり、説明変数間で多重共線性は発生していなかった。結果を表7に示した。ペープサート・指人形においては、Step2における R^2 の変化量が有意であり ($\Delta R^2=.24$, $p<.01$)、制作し

表2 ペープサート・指人形

	1	2	3
1 意欲	—		
2 イメージしやすさ	.441**	—	
3 制作しやすさ	.500***	.442**	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表3 壁面構成

	1	2	3
1 意欲	—		
2 イメージしやすさ	.465***	—	
3 制作しやすさ	.621***	.554***	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表4 身につけるもの

	1	2	3
1 意欲	—		
2 イメージしやすさ	.590***	—	
3 制作しやすさ	.323*	.585***	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表5 幼児のおもちゃ

	1	2	3
1 意欲	—		
2 イメージしやすさ	.435**	—	
3 制作しやすさ	.522***	.678***	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表6 クリスマスの制作

	1	2	3
1 意欲	—		
2 イメージしやすさ	.658***	—	
3 制作しやすさ	.274	.244	—

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

やすさが有意な正の影響を示した ($\beta = .35, p < .05$)。壁面構成においては、Step2における R^2 の変化量が有意であり ($\Delta R^2 = .39, p < .001$)、制作しやすさが有意な正の影響を示した ($\beta = .53, p < .05$)。身につけるものにおいては、Step2における R^2 の変化量が有意であり ($\Delta R^2 = .32, p < .001$)、イメージしやすさが有意な正の影響を示した ($\beta = .63, p < .001$)。幼児のおもちゃにおいては、Step2における R^2 の変化量が有意であり ($\Delta R^2 = .19, p < .01$)、制作しやすさが有意な正の影響を示した ($\beta = .40, p < .05$)。クリスマスの制作においては、Step2における R^2 の変化量が有意であり ($\Delta R^2 = .43, p < .001$)、イメージしやすさが有意な正の影響を示した ($\beta = .63, p < .001$)。

課題間で意欲、イメージしやすさ、制作しやすさに違いがあるかどうかを検討するために、それぞれにおいて、被験者内一要因の分散分析を行なった。その結果、意欲については課題の主効果が有意であり ($F(4, 200) = 14.60, p < .001$)、Bonferroni 法による多重比較の結果、ペープサート・指人形、壁面構成、クリスマスの制作間には差がなく、壁面構成とクリスマスの制作が、身につけるものと幼児のおもちゃよりも高かった ($p < .05$)。ペープサート・指人形、身につけるものと幼児のおもちゃ間には差がなかった。イメージしやすさについては課題の主効果が有意であり ($F(4, 200) = 5.81, p < .001$)、Bonferroni 法による多重比較の結果、壁面構成とクリスマスの制作間には差がなく、ペープサート・指人形、身につけるものと幼児のおもちゃよりも高かった ($p < .05$)。ペープサート・指人形、身につけるものと幼児のおもちゃ間には差がなかった。制作しやすさについては課題の主効果が有意であり ($F(4, 200) = 5.59, p < .001$)、Bonferroni 法による多重比較の結果、ペープサート・指人形、壁面構成、幼児のおもちゃ、クリスマスの制作間には差がなく、壁面構成とクリスマスの制作が、身につけるものよりも高かった ($p < .05$)。

考察

本研究では、制作活動に対する意欲が、制作活動に対する好き・嫌い、得意・不得意といった意識に影響されているのか、また制作物のイメージのしやすさや、制作のしやすさに影響されているのかについて、課題による違いも含めて検討した。

制作活動に対する好意度と得意度には弱い正の相関が見られ、好きであるほど得意であるという傾向は見られたものの、この関係が弱いことは、好きであっても苦手な学生がいるという島田 (2015) の報告とも一致する結果であった。

制作活動に対する意欲に対して、得意度、好意度が影響しているのか、またイメージしやすさ、制作しやすさが影響しているのかについて検討した結果、好意度と得意度は意欲に影響していなかった。

意欲に対する影響は、課題によって異なっていた。ペープサート・指人形、壁面構成、幼児のおもちゃの制作に対する意欲は、イメージしやすさが影響しており、イメージしやすいほど意欲が高くなる傾向があった。これに対し、身につけるもの、クリスマスの制作に対する意欲は、制作しやすさが影響しており、制作しやすいほど意欲が高まるという影響が見られた。

課題間での意欲に影響する要因が異なった理由として、個人で制作する課題か、共同で制作する課題であったかという違いが関係していたと考えられる。ペープサート・指人形、幼児のおもちゃは、個人で制作することが多く、イメージさえできれば、あとは自分の思うように制作できたため、イメージしやすさが意欲に影響したと考えられる。これに対し、身につけるもの、クリスマスの制作は、共同で制作することが多く、イメージができたとしてもそれをうまく共有できるかどうかという違いがグループ間で生じた可能性があり、意欲に対す

表 7 階層的重回帰分析の結果

	ペープサート ・指人形	壁面構成	身につけるもの	幼児のおもちゃ	クリスマスの 制作
	β	β	β	β	β
Step 1					
好意度	.27	.04	.06	.30	.22
得意度	.07	.10	.16	.04	.12
R^2	.10	.02	.04	.10	.09
Step 2					
好意度	.15	.00	.07	.06	.06
得意度	.01	-.02	-.03	-.01	.07
イメージしやすさ	.25	.17	.63***	.14	.63***
制作しやすさ	.35*	.53***	-.07	.40*	.14
ΔR^2	.24**	.39***	.32***	.19**	.43***
R^2	.33**	.40***	.36***	.29**	.51***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

る一貫した影響は見られなかったと考えられる。その代わりに、イメージしやすさよりも、単純に制作しやすいことが意欲につながったと考えられる。壁面構成は、共同で制作することが多い課題ではあったが、全体を共同で制作するというよりも、各パーツを分担し作成したものを合わせて完成させるという意味では個人で制作する課題に近い特徴があり、そのため、ペープサート・指人形、幼児のおもちゃと同様に、自分の担当部分のイメージしやすさが意欲につながったと考えられる。イメージしやすさや制作しやすさが高いということは、制作できるという自信が高いとも解釈できる。このことは、伊東ら（2022）が示したつまずきの要因の一つであった自信の低さがないことに通じる。また自己効力感（Bandura, 1977）の点からも、制作できるという自信があり、かつ具体的に制作するためのイメージや方法を持っているという自己効力感の構成要素を満たしており、イメージしやすいことと制作しやすいことは自己効力感を高めるという意味でも意欲を高めると考えられる。これらの結果からは、制作に対し意欲的に取り組むためには、まずは何を作るかという制作物のイメージを明確にすること、さらに、制作しやすさを高めるために、制作がスムーズに進むよう、その過程を具体的に認識することが効果的である可能性が示唆される。

課題間で、意欲、イメージしやすさ、制作しやすさに差が見られた。壁面構成とクリスマスの制作に対する意欲が、身につけるもの、幼児のおもちゃに対する意欲より高く、イメージしやすさは、壁面構成とクリスマスの制作が、他の3つより高かった。また、制作しやすさは、壁面構成とクリスマスの制作が身につけるものより高く、壁面構成とクリスマスの制作は、意欲、イメージしやすさ、制作しやすさのいずれも高かった。課題間に差が見られたものの、4件法で平均値が3を超えているものがほとんどであり、全体的に、意欲、イメージしやすさ、制作しやすさは高かったと考えられる。これは、設定した課題が、いずれも保育者となった際にも作成する可能性があるもので、学生自身にとっても就職したのちに役立つという実践的利用価値（伊田, 2001）が高く認識されていた可能性によると考えられる。中でも特に意欲が高かった壁面構成とクリスマスの制作は、制作したのちにどのように利用するかということがよりイメージしやすかったということも影響していたのではないかと推測される。

本研究では、苦手意識は意欲に影響していなかったが、そもそも苦手意識というものが何に対する苦手意識なのかという疑問もある。イメージが持てないから苦手なのか、制作の仕方がわからないから苦手なのか、上手に制作できないから苦手なのか、色々な可能性が考えられる。その意味では、領域「表現」の目的に示されている「自分なりに表現すること」は苦手意識をもったままでも可能かもしれない。その点で、本研究では、イメー

ジしやすさ、制作しやすさという具体的な内容を取り上げたため、その対象が曖昧な苦手意識よりも直接の影響が見られた可能性もある。本研究で示したように、イメージしやすさや制作しやすさを高めることで、意欲的に取り組むことができれば、これまでに授業改善によって確認されてきた効果（例えば、前沢, 2022；辻本, 2020；上田・石垣, 2019）をより高めることにもつながるのではないだろうか。

イメージしやすさや制作しやすさを高めるためには、辻本（2020）のように、経験不足を補うための描画材料理解を目的とした活動や、降旗（2016）が示した、上手・下手の呪縛から解放させること、うまさより自分らしさの表現を目指すこと、自分らしさの表現を可能にする用具の知識・技能、表現本来の楽しさを味わわせること、自分らしい表現が認められる学習空間の5つの要素を満たすことが有効かもしれない。

苦手意識に着目した研究もあるが、苦手意識そのものの軽減を目的とするよりも、保育者となった時に必要となる知識・技術を身につけ、領域「表現」の本来の目的を果たすために必要な経験を積むことが結果として苦手意識の軽減にもつながるのではないだろうか。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- 降旗孝 (2016). 図画工作・美術への「苦手意識」の実態と解消のための要素—目指すべき造形美術教育の教育コンテンツ開発に向けて— *美術教育学研究* **48**, 369-376.
- 伊田勝憲 (2001). 課題価値評定尺度作成の試み 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 **48**, 83-95.
- 井ノ口和子 (2019). 保育内容（表現Ⅱ）における授業実践の考察—指導者としての資質・能力の育成を目指して— *共栄大学研究論集* **18**, 209-222.
- 伊東一誉・赤羽尚美・田代琴美 (2022). 造形活動における「つまずき」要因の検討—自己評価、他者意識、身体性の関連— *美術教育学研究* **54**, 33-40.
- 香月欣浩 (2018). 幼少期のものをつくることや絵を描くことに対する他者からの評価がその後の造形表現の「好き」「嫌い」に与える影響—保育士養成課程の学生への調査結果を保育実践に役立たせるために— *美術教育学研究* **50**, 145-152.
- 前沢知子 (2022). 表現・制作活動に対する意識調査に関する一考察—保育士・幼稚園教諭・教員養成課程における「造形演習」の授業から— *埼玉学園大学紀要（人間学部篇）* **22**, 217-224.
- 松下明生 (2015). 幼児の造形活動と小学校図画工作科の内容分析—文部科学省検定済教科書に見る幼児課題との同一性と教育内容の変遷— *名古屋柳城短期大学研究紀要* **37**, 75-86.
- 大塚貴之・稲田達也 (2021). 幼稚園教諭・保育士養成課程における造形の授業が有する課題に関する文献レビュー *大阪総合保育大学紀要* **16**, 125-130.

- 佐善 圭 (2009). 保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果—切り紙、染め紙を活用した造形指導の実践的研究— 研究紀要 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学編 **43**, 31-40.
- 佐善 圭 (2010). 保育者養成校における造形教育の新たな授業試案とその成果Ⅱ—シルバーリング政策を導入した造形指導の実践的研究— 研究紀要 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学編 **44**, 1-12.
- 島田由紀子 (2015). 保育系学生の実習における造形活動 和洋女子大学紀要 **55**, 109-117.
- 辻本 恵 (2020). 保育者養成における造形活動についての考察—描画に対する「苦手意識の解放」を目指して— 神戸教育短期大学教育実践研究紀要 **2**, 17-23.
- 上田慎二・石垣倫生 (2019). 会が・造形授業においての学生の反応の考察—造形表現指導の学生の制作の意識の諸問題について— 鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要 人文社会・社会科学編 **2**, 315-325.
- 横田典子・米窪洋介・野田美樹・佐善圭 (2020). 若手保育者が抱える造形活動に対する課題意識—保育経験2、3年目の保育者を対象とした講習における質問紙調査からの検討— 研究紀要 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学編 **53**, 43-50.